都市出版『外交フォーラム』NO.154（2001 年 5 月号）掲載

【書評】

『6 Nightmares』

アンソニー・レイク著　リトル・ブラウン社　2000 年 10 月

評者　神保　謙
アジア太平洋研究センター研究員

クリントン政権時代の安全保障担当補佐官で、現在ジョージタウン大学で教鞭をとっているアンソニー・レイクが、21 世紀に予測される新しい安全保障上の脅威を「六つの悪夢」のシナリオとして提示したのが本書である。

「六つの悪夢」としてレイクが挙げるのは、大量破壊兵器で武装したテロ、サイバーテロ攻撃、曖昧な戦争、平和維持活動の破綻、国家の多様な脆弱性、ワシントン政治の危機である。それぞれの章は、フィクションの物語（例えば北朝鮮内部崩壊直後の米韓首脳の電話会談、コロンビアにおける平和維持活動の混乱を描く米陸軍将校の日記など）から始まり、在任中のエピソードを交えながら論旨を展開している。

「曖昧な戦争」章で、イラク爆撃のオプション、精緻化されたインテリジェンスの評価を巡り、各部局が対立するストーリーや、「e-crime」章で獄中から自らのサイバークライムを責任意識なく告白するハッカーの手紙などは臨場感に溢れている。

それぞれの悪夢の底流にあるのは、グローバリゼーションの深化と拡大によって変化している安全保障の姿である。近年の安全保障の多元化について、シナリオを交えながら説く書は多い。しかし、安全保障実務の中枢にいたレイクが、将来想定される脅威を具体像として描き出し、実務的経験を結び付けつつ論及したことに本書の最大の価値があるといえるだろう。数多くの在任中のエピソードが挿入されていることにより、本書は回顧録としての価値をも持っている。

第六の悪夢として「ワシントン政治」を挙げた背景には、ＣＴＢＴ批准の議会否決、ＣＩＡ長官指名プロセスの混乱の経験を経たレイクの痛烈なワシントン政治批判を読み取ることもできる。米国内政治がグローバルな影響をもたらすことを、ワシントン政治がより深く認識すべきとの警鐘が込められている。